

資料3 手話の地域・年代の違い

【地域の違い】

現在、どこにおいても大体同じ手話が用いられているが、一部の手話は地方によって異なる。

例えば、「名前」という手話は、関東圏では“手のひらに親指をつける形”だが、関西圏では“胸に親指と人差し指で作った丸を付ける形”である。(図1)

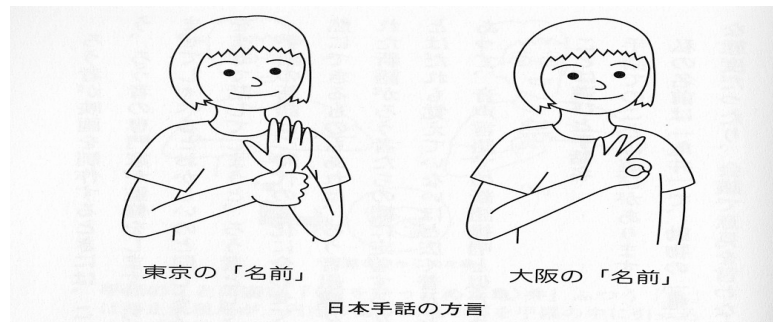


図1．東京（関東圏）と大阪（関西圏）の「名前」

他にも、「学校」という手話は、関東では“勉強”＋“場所”だが、関西では“家”に“教える”を組み合わせた手話である。(図2)



図2．関東圏と関西圏の「学校」

このように、地域によって手話表現は異なる。

【年代の違い】

地域による違いのみならず、年代による手話表現の違いも存在する。

例えば、「始まる」の手話は現在、“明るい”の手話と似た形であるが、一昔では“明るい”ではなく、“本を開く様子を表した手話”（図3）が用いられていた。



図 3．昔の「始まる」の手話

同じく「終わる」も、現在は“両手を下方に移動させながらすべての指をくっつける形”（図 4）だが、以前は“本を閉じる様子を表した手話”であった（図 3 の逆の動き）。

また、「良い」の手話は、現在も昔も“握り拳を鼻の前につける形”だが、現在の“片手一つだけつける形”に対し、昔は“両手 2 つの握り拳をつける形”であった（図 4）。

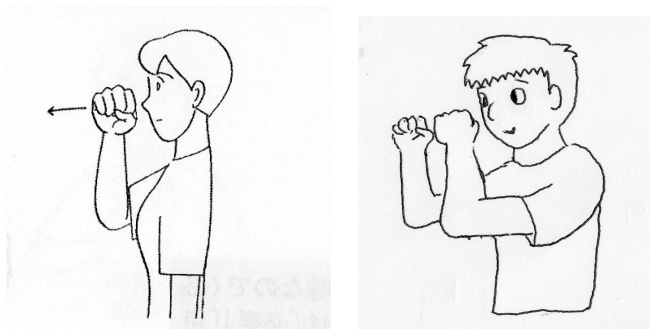


図 4．現在と昔の「良い」

このように、今と昔で全く違う表現もあれば、昔の手話表現を簡略させたものを使っている場合もみられる。